うどん県・高松のど真ん中にボールパークを造ろう！[†]

石 原 豊 一*

Let's Build the "Ball Park" at the Inner City of Takamatsu, "Udon Prefecture"[†]

Toyokazu ISHIHARA*

は じ め に

地方の疲弊が叫ばれて久しい。その中、スポーツを通じて「町おこし」をしようという試みが各地でなされている。2005年にスタートした我が国の独立プロ野球リーグ（独立リーグ）もそのコンテンツのひとつだろう。既存のプロリーグである日本野球機構（NPB）への人材供給を目的としたこの小規模プロ野球だが、若者に夢への再チャレンジの場を与えると同時に、「地域密着」の名の下、フランチャイズを置いた地域への貢献も謳っている（注1）。

本稿においては、この独立リーグのひとつである四国アイランドリーグplus（四国IL）理事長・鍵山誠が取り組もうとしている香川オリーブガイナーズ（香川OG）の本拠地球場として県都・高松に新球場を建設しようという構想について紹介する。独立リーグという新しいコンテンツを使い、地方都市にその町の身の丈にあった「ボールパーク」を新造することによって町おこしの総仕上げにしようという提案であるが、この提案はスポーツと地方都市とのつながりをより強め、北米型のプロスポーツ経営の道筋をつくっていくものである。

1. 我が国の地方都市の現状と小規模プロスポーツの可能性

人口減が不可避となった我が国の現状におい

て、とくに地方都市はその現実に向き合う宿命にさらされている。少子高齢化という現実を目の前にして、すでにいくつかの地方都市は「身の丈」に合った町づくり、「コンパクトシティ」化を目指して動き出している。

例えば、日本海側の県都、富山市や福井市は、「オワコン」だったはずの路面電車をライトレール化することによって、自家用車に頼らないコンパクトな町づくりを志向している。独立リーグが、この両都市を県都とする富山、福井両県をフランチャイズとする球団を持っていることは、地方中核都市と小規模プロスポーツとの親和性を示していると言える。

本稿で取り上げる香川県のある四国は、とりわけ人口減が著しい地域である（注2）。この地方では駅前の多くはさびれ、町の機能は、物流の大動脈である町はずれの国道やバイパスに移動しているのが現実である。このような状態は、一旦は全国チェーンがバイパス沿いに進出し、地域の雇用の拡大を生むが、やがて旧来の商店が軒を連ねていた町の中心の衰退を招き、人口減に拍車がかかれば全国チェーンも撤退するという負のスパイラルに陥る。

このようなスパイラルを回避するためには、「シャッター通り」を出さない町づくりが必要となるのだが、香川県高松市は丸亀町を中心とする地元商店街の活性化を軸としたコンパクトシティの成功例のひとつとして挙げられる¹⁾。

[†] 原稿受付 2016年8月31日 原稿受諾 2016年11月10日

*〒567-0041 大阪府茨木市下穂積1-3-419

*1-3-419, Shimohozumi, Ibaraki, Osaka, Japan (567-0041)

この高松，あるいは香川県に本拠を置くのが香川OGである。

2. 独立リーグという新たなプロ野球：地域活性化のコンテンツとしての小規模プロスポーツ

ここで本稿において町づくりのコンテンツとして期待する独立リーグについて述べておく。

独立リーグとは，既存のプロリーグ，もしくは当該競技のトップリーグとは別組織として発足したスポーツリーグのことである²⁾。野球の場合は，高報酬が期待できる既存のプロリーグに入れなかった選手にとって，再挑戦のための一時的なプレーの場となっていることが多い。当然，そこでプレーする選手の技量はプロとしては高くなく，報酬も低い。

このようなリーグがプロ野球の本場，北米でできたのは1993年のことである。その後，幾多のリーグが栄枯盛衰をくりかえしながら，現在においては，成功したいくつかのリーグが地方都市の人々にとって欠かせないエンタテインメントとしての地位を確立している。

日本においては，景気低迷による社会人実業団チームの減少の中，2004年のいわゆる球界再編騒動を受けて四国アイランドリーグが発足し，翌2005年からリーグ戦を開始したのが最初である。このリーグは，2007年には九州へ拡大し，四国九州アイランドリーグ，さらに2011年には，近畿圏からの加盟球団を加え，現在の名称である四国アイランドリーグplusと改称して現在に至っている。また，この年から，福岡ソフトバンクホークス三軍との定期交流戦が開始され（注3），NPBへの人材育成リーグという役割をますます強めた。

2014年には後発のルートインBCリーグ（BCL）とともに，日本独立リーグ野球機構を設立し，NPBとの間に外国人選手移籍の際の金銭的なルールとパイプを構築する一方，アマチュア球界との関係改善に努め，翌2015年からは，日本野球連盟主催の大会に参加するようになった（注4）。

また，リーグ創設10周年を機に，リーグの

フォーマットの大幅な改革を行い，2015年から，シーズンの前後期の2ヶ月の休止期間にリーグ選抜チームによる北米遠征を開始している（注5）。そして，2016年からは，福岡ソフトバンクの3軍戦に加えて，この年に発足した読売ジャイアンツ3軍との交流戦を開始するなど，さらなる発展を続けている。

3. 小規模プロスポーツのメッカとしての高松

香川OGは，前章で述べた四国アイランドリーグplusの強豪球団である。リーグ創設以来12年の歴史でシーズン優勝5回，BCLとの間で争われる独立リーグチャンピオンシップ優勝3回のまさに名門というにふさわしい実績を残している。独立リーグの主目的である上位リーグへの人材輩出の面においても，発足以来累計23人の選手をドラフトを経てNPBへ送り出している（注6）。

香川県には，この独立野球チームのほか，サッカーJ2のカマタマーレ讃岐，バスケットボールBリーグの香川ファイブアローズなどのプロチーム，それに社会人アイスホッケーチームの香川アイスフェローズがあり，これら4球団は香川プロスポーツクラブ連絡協議会を結成し相互の連携を図っている。

従来「地域スポーツ」と言えば，市民が「する」スポーツというイメージが強かったが，ここ高松では，「観るスポーツ」を通じて人々が時間と場所を共有し，絆を深める素地があると言える。ここからは，地方都市再活性化のコンテンツとしての小規模プロスポーツの可能性が見出される。

4. 小規模プロ野球にフィットしない地方球場の現状：香川県営野球場（レグザムスタジアム）を例に

プロ野球興業の成功に，その器であるスタジアムの質が大きくかわることは，すでに石原が指摘しているが³⁾，二軍や独立リーグがスポーツビジネスとしていまだ未発達な我が国の現状において，地方球場は小規模プロ野球を受

け入れるにふさわしいものとはなっていない。

収容数千人規模の小球場は、アマチュアの使用に主眼が置かれ、プロレベルの選手がプレーする際の安全性や、観客がゲームを「観る」という視点に欠けている。その一方、主に各県庁所在地にある万単位の収容人数をもつ大球場は、NPB一軍の公式戦に耐えうる設備を整えているのだが、年数回しか開催されないNPB一軍の試合のために、多額の建設費をかけて2万人規模のスタジアムを建設する必要があるのだろうかという疑問を払拭するに至っていない。

香川OGがメイン球場として使用しているのは、高松市にある県営球場である。2010年からネーミングライツにより「レグザム・スタジアム」の名を球場名として使用している。

1982年建造で収容2万2,000人のこの球場でNPB一軍の公式戦が開催されたのは、開場以来で11試合に過ぎない。また、築35年という年数は大幅な改修か新球場の建設の必要を生じさせている。

香川OGは、発足以来この球場で公式戦の大半を実施しているが、球団職員の間からも、客席、トイレの老朽化や多すぎる収容人数、立地の悪さが指摘されるなど（注7）、独立リーグという小規模プロ野球の本拠地球場としてこの球場が決して向いていないことが示唆される。

5. 「身の丈」にあった地方球場の試み：丸亀市民球場（四国コカコーラボトリングスタジアム丸亀）を例に

前章のような現実を前に、香川県には2015年に新球場が誕生した。丸亀市民球場の建設には、四国IL理事長の鍵山誠も自身の経験から様々な意見を提言するなど、少なからずかわっており⁴⁾、球場のネーミングライツもリーグのメインスポンサーである四国コカコーラボトリングが取得している。開場以来、ここで高松の球場に次ぐ試合数をこなしている。

1万という収容人員（注8）は、NPBの一軍公式戦誘致を主眼としてこの球場が建てられ

たのではないことを示している。実際、ここではNPBの試合はオープン戦と二軍戦しかこれまで実施されていない。

『スポーツで新しいにぎわいを創出するまち』を標榜する球場所有者の丸亀市当局は、新球場とサッカーJ2が使用する陸上競技場を含めた丸亀総合運動公園を県内スポーツの拠点とするとともに、市の新しい賑わいの中心とすることを期待している。この期待は、満員の来場者を集めた柿落しのNPBオープン戦、二軍公式戦やILの公式戦を通じて、市民がプロ野球を観戦することで、この町に「新たなスポーツ文化」が根付き始めたことで叶えられているという（注9）。

また、プロだけではなく、学童から高校野球のアマチュアの使用も念頭においたこの球場は、「地域に根ざした本格的な野球場」であるとともに、LEDボードを備えた大型スクリーンやこれまでの日本の球場になかったバーベキューができるピクニックデッキを備える大規模集客施設として、地域の活性化を促進する社会基盤としてより一層の利活用を目指すという。

スポーツイベントをきっかけにして建造された巨大スポーツ施設の維持が問題視されている昨今、身の丈にあったスタジアム建設は、独立リーグやサッカーのJ3、プロバスケットボールなどの小規模プロスポーツが広がりを見せる中、スポーツを利用した地方の再活性化の突破口になるはずである。

提 案

以上を踏まえた上で、本稿では、県庁所在地の高松の中心部に「ボールパーク」を建設することを提案したい。「ボールパーク」とは、単なる競技場にとどまらない、人が集まる娯楽施設を指す。

丸亀球場は確かに独立リーグにはちょうどいい器ではあるものの、丸亀市街から約4kmというその立地を考えると、町の活性化という点でまだ満足できるものではない。そこで、これ

と同様の規模のものを高松の市街地に新造して街づくりの総仕上げをするというのが、本稿における提案である。老朽化した県営球場に代わる集客施設としての「ボールパーク」を町の中心に建設し、独立リーグの試合開催に加え、様々なイベントをここで開催する。町の中心部に球場があれば、イベント後に観客が盛り場へ繰り出せるような人の循環が生まれ町のさらなる活性化につながる。

増田は、現在のヒト・モノの東京への一極集中と人口減に警鐘を鳴らす中で、地方から大都市への人の流れを変える必要性を説いている¹⁾。そして、その方法論のひとつとして、地方中核都市の発展を提示している。旧来の企業スポーツ中心の体系が崩れつつあり、地方規模プロスポーツが勃興している今、地方都市において、スポーツ観戦をきっかけとした町の賑わいを志向することは、今後のスポーツのあり方を変えていくとともに、新たな「この国のかたち」を模索する方法論となるに違いない。

(注1) 日本の独立リーグは、特定の都市に本拠地を置く北米のプロ野球やNPBとは違い、県全体をフランチャイズとしている。

(注2) 四国全体の人口は1985年にピークの422万7,225人を記録した後、1995年に微増があった以外は減少の一途をたどり、2015年には384万7,000人までに落ち込んでいる。香川県は、他県が1980年代後半に人口減を迎えた中、1990年代後半まで人口を増やしたが、それでも1999年に103万388人を記録した後人口減に転じ、2016年の県発表値において97万2,675人にまで落ち込んでいる⁵⁾。

(注3) ホームアンドアウェー方式で各球団8試合が行われるこの交流戦は、リーグ戦の公式戦扱いでシーズン成績に組み入れられる。また四国LL4球団の中で順位を決め、交流戦優勝チームも別途決定する。

(注4) 2015年からJABA四国大会にリーグ加盟球団のうち1チームが参加している。

(注5) この遠征では、北米独立リーグの強豪のひとつとされるカンナムリーグ(Canadian-American Association)に公式戦扱いで参戦している。

(注6) この数字には育成指名を含めている。また、リーグ全体では49人がドラフト指名を経てNPB球団と契約した。

(注7) レグザムスタジアムから市中心の高松駅までは約9kmある。公共の交通手段は限られており、球団では週末の試合中心に市内から有料のシャトルバスを運行してこれに対応している。また、この球場は香川OB主催のナイター開催時は、近隣で行われる漁業への配慮から外野の照明を1基点灯しないという措置を採っている。ここからは、この球場が、恒久的なプロ興業を想定して建設されたものではないことがうかがえる。

(注8) このうち内野席は5,000席である。この座席数は、北米のマイナーリーグのそれと近い。その意味でも、この球場は小規模プロ野球の興業に適したものと言うことができる。

(注9) 丸亀市生活環境部スポーツ推進課ホームタウン推進室室長村尾剛志氏からのEメールによる私信(2016.5.26)

参 考 文 献

- 1) 増田寛也編著：地方消滅：東京一極集中が招く人口急減，中公新書，2014。
- 2) 石原豊一：独立野球リーグの現状－企業スポーツからプロリーグへ，『体育の科学』，60-5，pp.318-322，2010。
- 3) 石原豊一：日本におけるプロ野球マイナーリーグの持続的モデル構築に向けて－野球ビジネスの日米比較から－，『スポーツ産業学研究』，No.21，Vol.1，pp.73-84，2011。
- 4) 石原豊一：問答有用：鍵山 誠（四国アイランドリーグplus理事長）「挑戦を諦めた僕の後悔が，リーグ経営の糧です」，『週刊エコノミスト』，94-32，pp.48-51，2016。
- 5) 日本経済新聞四国経済面，2016.2.27。